元気な百歳が、乳癌

平成２４年１月２６日

浦山久昌

元来、病気がちだった女性が、鍼灸治療により、健康を維持し、９９歳まで元気に活動し、乳癌が発見されて１ヶ月の入院で亡くなった症例である。

症例　女性　９３歳　無職

初診　平成１４年１１月１３日

主訴　元気で生きていたい

現病歴　明治４１年２月に７ヶ月 の早産で誕生し、父親の懐で育てられた。病弱で、赤ん坊の時に猩紅熱に罹患し発熱、左胸部の乳房上部に瘢痕を残して治癒した。

小指をネズミに囓られて、高熱を出し、すぐに原因がわからず、十日間入院し治癒した。関東大震災では、銀座の仕事場で被災したが、四谷の自宅まで歩いて避難した。怪我はなかった。結婚し、昭和１３年頃男子を出産したが、４歳で疫痢で死亡した。昭和１９年女子を出産した。今も健在である。昭和２０年３月、東京の大空襲のころから２ヶ月間 40 ℃の発熱が続いた。内科の医師の診察を受けたが、原因が不明で、人に勧められて、産婦人科を受診したところ胎児の死亡による発熱と判明した。処置を受け、一命を取り留めた。

昭和２２年、妊娠したが、死産であった。

昭和２６年、急激な腹痛で、入院した。卵巣嚢腫で、子宮と卵巣の摘出手術を受けた。

手術により、体力が低下し、家事労働は、同居の義妹が行うようになった。

昭和３５年、娘が喘息なので、東京都幡ヶ谷から、環境の良い、柏市へ転居した。新築の家の壁が乾ききらない内に入居したせいか神経痛になった。胆石症にもなったが、薬で良くなった。身体が弱いので、１週間と続けて起きていられない、発熱や頭痛で年中、寝たり起きたりの毎日であった。義妹に、毎日、背中をマッサージしてもらっていた。元気になりたいと思い指圧の治療を受けたりした。

昭和５１年頃から鍼治療が良いと人に勧められ北千住の吉岡先生の所へ通院した。３週間に１度の通院で、徐々に元気になってきた。昭和５４年に夫と死別。

平成１２年吉岡先生が、閉院したので、柏の他の鍼治療院へ行っていたが、近所の方の紹介で当院へ来院した。

現在、特に悪いところはないが、鍼で健康を維持して元気に生きていたい。死ぬときは、コロリと死にたい。

生活は、義妹と２人暮らしで、老人会に所属し、会合や旅行に行っている。ゲートボールの会から旅行の時は誘われるので、年２回くらい、一緒に旅行する。趣味は、和裁、洋裁、パチンコで、パチンコはほぼ毎日、１回３時間以上、楽しんでいる。服装はいつも和服で、当院へは、家か１０分ほどの距離を、下駄で歩いて通院している。食欲はあり。ウナギや天ぷら・マヨネーズが好物である。晩酌はしないが、会合ではビールを飲む。

診察所見　歩行も姿勢もしっかりしている。腰の前屈痛・後屈痛・側屈痛はすべて陰性。頚の後屈痛・左右の側屈痛も陰性。左右ともに膝関節の屈曲痛も陰性。左乳房の上部にケロイド状の瘢痕と皮膚が薄くなった陥凹が認められる。

診断　年齢が高齢で、元気ではあるが、疲労を貯めないように、身体全体の筋疲労の予防と血液循環の維持改善を図る必要がある。

治療・経過　身体全体の筋疲労の予防と血液循環の改善を図るため、以下の治療を行った。まず、左側臥位で、天柱、風池、五頚、肩井、肩中兪、風門、厥陰兪、督兪、肝兪、胃兪、腎兪、志室に、ステンレス針１寸６分－３番（４８ mm －３号針）を斜刺で深さ約１５ mm 、１０分間の置針を行った。 次に右側臥位で左の天柱、風池、五頚、肩井、肩中兪、風門、厥陰兪、督兪、肝兪、胃兪、腎兪、志室にも、ステンレス針１寸６分－３番（４８ mm －３号針） を斜刺で深さ約１５ mm 、１０分間の置針を行った。

背臥位で、扶突、斜角、中脘、承満、天枢、足三里にステンレス針１寸６分－３番（４８ mm －３号針） を斜刺で深さ５～１５ mm 、１０分間の置針を行った。最後に座位で百会に半米粒大の透熱灸を３壮施灸した。

経過は順調で、週に２回欠かさず、定期的に通院し、好きなパチンコや旅行など元気に活動出来た。約４年半経過した平成１８年に満９８歳の誕生日を迎えた。

第４４９回（１５７６日目）３月２９日、先日、庭で水撒きをしていて、胸を打って、出血したと胸にガーゼを当てていた。痛みは無く。出血しているだけです。

診察すると、写真１のように、創傷や内出血などは無く、腫瘤の付近の出血である。

何かおかしい、これは何と感じながら。出血の治療として、出血場所に、直接施灸を行った。米粒大の艾を３壮宛、３カ所に施灸した。他の鍼灸治療は、同じ治療を行った。

患者への対応　この出血は、お灸をして様子を見ますが、良くならなければ、病院へ行って下さい。

第４５２回（１５８４日目）出血は、灸によっても止血することが出来ず。近くの皮膚科へ行くように指示した。

第４５７回（１６０１日目）相変わらず、元気で、胸の状態は変わらず、胸の灸は中止した。病院には行っていない。

第４６１回（１６１５日目）今年から、泊まりの旅行は、周りの方に迷惑を掛けるので参加しません。

第５４０回（１８９０日目）昨日、数えの百歳となった。

１２０歳まで生きると言っている。

第５５６回（１９５０日目）この頃から、表情に疲れが見える。

第５６８回（１９９７日目）外出が困難になったので、往診の依頼があった。食欲が落ちて、お粥を食べている。体力も落ちて、自立歩行ができない。治療すると、呼吸や身体が楽になる。

第５９１回（２０２５日目）昨日、下血があった。トイレに行く事が出来なくなったので、介護支援が必要と考え、介護認定の手続きを勧めた。

翌日、介護認定の医師が往診し、乳癌の疑いで、すぐ近くの外科病院に入院した。特に処置はなく、点滴による栄養補給と点滴による治療であった。入院から約１ヶ月、７月２６日に永眠した。死亡診断書には心不全と記載されていた。

考察　本症例は、初診時９３歳である。年齢的には、超高齢者と呼ばれている。

この症例は、元来、病弱と考えられ、昭和５１年ごろから鍼治療により、元気になったと言っている。実際に初診時の 93 歳から 98 歳までは、実に活動的であった。年齢から

考えられない程の行動を行っている。ほぼ毎日のパチンコで３時間以上も楽しんでいる。年に６回の旅行をして、老人会などの活動を行っている。この陰には、家事労働をすべて義妹が引き受けていることも関与していると考えられる。また、昭和５４年に夫と死別しているが、最初は悲しくても、夫を見送ってしまった安心感なども作用していると思われる。やはり、鍼灸治療による身体と心のケアが一番役立っていると考えられる。週に２回定期的に鍼灸治療を行っている事によって、所期の目的である疲労の回復と、血液循環の改善を実施し、元気に生きる事に役立ったと考察する。

最終的に乳癌の存在が判明したが、この乳癌が主な死亡原因であるかは定かではない。田久保によると９０歳以上で癌を持っている割合は４３パーセントと言っています。

さらに何らかの病気で入院し亡くなられた高齢女性の場合、自分では乳がんに気づかなかったケースが 17 人に 1 人はあるということです。しかし、あわてる必要はありません。これら小さな乳がんが人の命を奪うまでには、10 ～ 15 年以上必要であろうと考えられるからです。外科手術をされた 85 歳以上の乳がん患者さんの特徴を調べてみますと、乳房の中に腫瘤を自分で見つけても、3 分の 1 の患者さんは 1 年以上病院にかからず放置していました。それでも、乳がんにより亡くなった方は少数です。また高齢者の乳がんを顕微鏡で見てみますと、高分化ながんや粘液がんが通常より多く、これらのがんは、比較的人の命を奪うことが少ないと考えられています。と言っています。本症例にも確かに乳癌があるが、その関連で死亡したかは、断定できませんでした。

しかし、乳癌による、死亡と考えた場合、１０年から１５年以上前に罹患したこととなります。

いずれにしても、本人の願っていた、元気に生きて、コロッと死ぬことが出来たのではないかと考察する。

参考文献

１）田久保海誉：公開講座「がんは若者と高齢者でどう違うか」,東京都健康長寿医療センター研究所

２）野口昌邦：「乳癌テキストー正しい知識と理解のためにー」,2003,南江堂

写真１